

	序にかえて——几帳の「紐」が、琴を「弾き鳴ら」すか——	1
[一]	表象性 (Connotation) ということ	21
	一 夕顔という花	21
	二 「かきつばた」の漢字表記について——「誤用」とはどういうことか	31
	三 「露」とへつゆ	47
[二]	「添ひ臥す」について——「添ひ臥す」とは、二人で寝ることか	63
[三]	「枕をそばだつ」について——望郷と絶望	95
[四]	「峰の松風」について——「樊姬」から「斎宮女御」まで	129
[五]	「源氏探索」ノート	151
	一 「心もとなからめり」か	
	「心もとなからざめり」か——夕顔像の一面と「山の端」	151
	二 けうとくもなりにける所かな——言霊発言	162
	三 「みて」と「いて」——「物の怪」の意識	185

四	「はしたな」く響く「松風」とは——「琴曲」に共鳴する母娘——	191
五	「みちみちしくくはし」について——「螢」の巻の物語論——	198
六	「心ことなりなむかし」か、 「心ことなりな。むかし……」か——夕顔の家——	213
七	人は琴を枕にして寝るか	227
1	「枕」と「御枕」——高貴な人は、横になっていることが多いか——	227
2	「臥枕琴」ということ	238
八	「老いは、えのがれぬわざなり」——秋霜烈日——	250
九	「蓆」を下ろすと「風景」は見えなくなるか——「雪山童子」——	261
十	「何にかかれる」——松蘿の契——	268
[六]	再度、夕顔という女——『源氏物語』は、おもしろいか——	290
[七]	浮舟の愛と死——「白き扇」から「鏡鸞」説話まで——	315
一	「愛」の唱和——蕭史と弄玉——	315
二	「なかぞら」の愛——運命の岐路——	335
三	死への道程——孤鸞のなげき——	346
あとがき	……	379

これは『説郛』という書物の性格に起因するものではないか。門外漢の勝手な想像であるが、何らかの意味・理由から、メインの書籍群からはずれた運命にある書物を、後世に伝えようとす。そういう書物の辿って来た経緯が、こういう現象を、編纂者に強いたのではないか。如何に編纂者が苦心しても、そのまま通り過ぎるより仕方のない条件を背負ったまま存在して来た書物群ではないのか。予想を越えた、さまざま条件が重なって、一つの原則で律する事が困難となり、編纂者の「良心」を悩ませた、その痕跡が、こういう齟齬となって遺されたのではないか、などと門外から推測する。

『説郛』所収『古琴疏』の「内容（南北朝末、徐修仁・薛德音まで）」と「序文」を共に見る時、『古琴疏』は、意外と古い成立の書であったかもしれない。

それはそれとして、「峰の松風」成立に不可欠の、樊姫に関わる「繞梁説話」は、遠く古い時代から広く知られた故事であったのは確実であろう。別掲の『峰の松風』成立過程図』を参照されたい。

（本稿は、本書の他の章に必要でもあるので、この機に、拙著『源氏物語の実相』所収の「歌語峰の松風」に関する部分の稿を更め、補正したものである）

目次	本文
序文	本文
第一章	本文
第二章	本文
第三章	本文
第四章	本文
第五章	本文
第六章	本文
第七章	本文
第八章	本文
第九章	本文
第十章	本文
終章	本文

[五] 「源氏探索」ノート

一 「心もとなからめり」か「心もとなからざめり」か

——夕顔像の一面と「山の端」——

「夕顔」の巻、源氏が夕顔を某院に連れ出す場面。

明け方も近うなりにけり。鳥の声などは聞こえて、御嶽精進にやあらむ、ただ翁びたる声に、額づくぞ聞こゆる。起居たちろのけはひたへがたげに行ふ。いとあはれに、あしたの露に異ならぬ世を、何をむさぼる身の祈りにかと聞きたまふ。南無当来導師とぞ拝むなる。

「かれ聞きたまへ。この世とのみは思はざりけり」

と、あはれがりたまひて、

「優婆塞うはそくが行ふ道をしるべにて来む世も深き契りたがふな」

長生殿の古き例はゆゆしくて、翼はねをかはさむとは引きかへて、弥勒の世をかねたまふ。行く先の御頼め、いとこちたし。